

令和 3 年 5 月 20 日
京都府丹後農業改良普及センター

梅雨期における農作物管理について

先日気象庁より、5月16日付けで近畿地域の統計開始以来最も早い梅雨入りが発表されました。平年比21日早い梅雨入りであり、連続した降雨による作物の根いたみや病害発生、低日照による生育停滞等が懸念されます。

つきましては、次の事項を参考にいただき、事前及び事後対策の徹底をお願いします。

<作物別対応>

1 水稲

【事前対策】

- (1) 排水口及び排水路の整備・清掃を行う。
- (2) 日照不足・多雨条件下では、いもち病や白葉枯病等が発生しやすくなるため、発生予察情報等を活用し適切な防除を行う。

【事後対策】

- (1) 冠水した際は速やかな排水に努めるとともに、排水後に清水と入れ替える。
- (2) 稲の状態を確認し、落水による根への酸素供給等により生育回復を図る。
- (3) 冠水田では、黄化萎縮病や白葉枯病、アワヨトウなどが異常発生する場合がありますため、防除指針に準じ適切に防除を行う。

2 豆類（枝豆含む）

【事前対策】

- (1) 黒大豆等は生育初期に湿害を受けると種子の腐敗や生育不揃い等が生じ、その後の生育に悪影響を生じるため、明きょ排水の設置等の対策を行う。また、明きょ設置の際は排水溝と溝を接続し、ほ場に水がたまらないようにするよう努める。また、まくら地の溝を一段低くして確実に排水できるよう努める。
- (2) 7月中旬に播種期を迎える小豆では、排水溝の設置や排水口周りの整備等十分な排水対策を行い、適期は種ができるようにほ場の準備に努める。また、溝尻が排水口に接続するように対策を行う。

【事後対策】

- (1) ほ場が浸水・冠水した場合は、速やかな排水に努める。
- (2) 茎疫病や白絹病等の土壌病害の発生が懸念される場合は、各品目の防除指針に準じて株元を重点に散布し、予防に努める。
→病害株が確認された場合は早急に抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する。

3 野菜、花き

【事前対策】

- (1) パイプハウス等の施設栽培では、ハウス周囲の排水溝を整備し、ハウス内への雨水の流入を防ぐ。
- (2) 高湿度が続くと灰色かび病等がまん延する可能性があるため、換気に注意するとともに梅雨の合間に薬剤散布を行う等予防に努める。
- (3) 露地栽培では、溝尻や排水溝を整備し、ほ場内に滞水しないようにする。

【事後対策】

- (1) パイプハウス等の施設に浸水した場合は、早急に排水に努めるとともに、換気や採光に十分留意し、土壌の乾燥に努める。
- (2) 畝間及び排水溝に水が溜まっている場合は、速やかな排水に努める。
- (3) 茎葉に跳ね返り等で泥が付着している場合は可能であれば水で洗い流す。また、病害の発生が懸念される場合は、各品目の防除指針に準じて殺菌剤の予防防除を行う。
- (4) 根いたみや茎葉の汚損により草勢の低下が懸念される場合は、少量の追肥や低濃度液肥の葉面散布等を行い、草勢の回復を図る。
- (5) 果菜類で根いたみ等により草勢が衰えている場合は、摘果や若取りを行い、草勢の回復を図る。
- (6) 葉菜類においては、天候回復後の強日射によって葉焼け等の発生が懸念されるので、寒冷紗等で遮光する等の対策を講じる。

4 果樹

【事前対策】

- (1) 排水溝の点検や溝切りを行い、樹園地内に滞水しないように整備を行う。
- (2) 水田転換園等の排水不良園では明きょなどを設置して排水溝の整備を行う。
- (3) 長雨が予想されるときには薬剤散布による病気の予防を優先すること。

【事後対策】

- (1) 樹園地内に滞水が見られる場合は、排水溝の再点検を行うとともに、溝切り等の整備やポンプアップ等により速やかに排水して土壌の乾燥に努める。
- (2) 強い風雨の後には、病気の発生が懸念されるため、各品目の防除指針に準じて殺菌剤の予防散布を実施する。

5 茶

【事前対策】

- (1) 降雨量が多い場合は土壌浸食の恐れがあるので、排水路や周辺の排水溝の整備・点検を行う。
- (2) 収穫期間中の茶園については、天候による刈り逃しがないよう生産者間で連絡を密にとり効率的な生葉の持込を行うよう努める。摘採中の降雨によって生葉が濡れた場合は、可能であれば生葉コンテナの通風等により製造前に余分な水分を飛ばすことが望ましい。

【事後対策】

- (1) 畝間及び排水溝に水が溜まっている場合、速やかな排水に努める。
- (2) 豪雨及び強風の後には、病気の発生が懸念されるため、幼木園等で収穫していない茶園については、防除指針に準じて殺菌剤の予防散布を実施する。

※農薬散布は梅雨の合間の曇りの日か晴れた日であって風が弱い日に行うこと。

熱中症に注意

梅雨時期は日射こそ強くありませんが、ハウスや室内で過ごしている間に室温や湿度が上昇する場合や屋外で活動した後に室内で適切に体を冷やすことができない場合などには熱中症になることがあります。

こまめな水分・塩分の補給を行うとともに、適宜休憩を行いながら作業を行ってください。